

人間学科共通科目「人間学」講演

## 出会いは人生の宝物

島田歌穂

日時：2016年5月26日午前9時

会場：創価大学 S201教室

みなさん、おはようございます。ご紹介いただきました女優・歌手の島田歌穂と申します。今日はこのようなチャンスをいただき、感謝でいっぱいです。実は私は、創価大学の通教生です（笑）。スクーリングが大好きで、卒業目指してがんばっております。今回の講義のお話をいただいた時に、在籍中の私が担当させていただいていいのであろうかと悩みました。実は一昨年にも、通教の夏季スクーリングの特別講義を担当させていただきました。そのときも必死でしたが、今回は通教ではなく文学部の講義ということで、どうやって何を語ったらいいんだろう、と本当に悩みました。それで文学部人間学科の三指針をネットで検索させていただきました。「生命の尊厳の探究者たれ」「人類を結ぶ世界市民たれ」「人間主義の勝利の指導者たれ」——これを日々、生命に刻んでおられるみなさんに私は何をお伝えできるのか、不安でいっぱいですが、この出会いを与えていただいたことに感謝して、精一杯お話しさせていただきたいと思います。

タイトルは「出会いは人生の宝物」です。一昨年私はデビュー 40 周年を迎えました。振り返ると、良いときも悪いときも、うれしいときも悲しいときも苦しいときも、すべての出会いに意味があり、その一つ一つが私の心のなかの宝物になっています。どれひとつ欠けても今の自分はない、まさに出会いは人生の宝物なんだと、そう感じる日々であります。拙い人生ですけれ

ども、私自身のこれまでのさまざまな出会いを辿りながら、そのなかで学ばせてもらったこと、影響されたこと、また深く心に残っていることなどを紐解いていきたいと思います。

## 生い立ちからデビューまで

私は1963年に生まれました。父親似で、瓜二つ。父は音楽家でした。母は宝塚歌劇団の女優からジャズ歌手になった人です。その二人の間に生まれた一人っ子です。歌穂は本名です。父の名前が敬穂（たかほ）というので、そこから字をもらって、歌に穂で歌穂という名前になりました。両親の影響で音楽が常に家のなかにあふれていました。母は私がおなかにいる時にもステージで歌っていたので、いわゆる胎教で母が歌うジャズを聴いていたんです。また、父が家でボイストレーナーとして歌を教えていたので、気がついたら英語の歌を耳で聞いたまま真似して歌っているような子どもでした。そして4歳でバレエを習い始めました。バレエの稽古も大好きで、休まずに通っていました。物心ついたころから私は歌ったり踊ったりすることが大好きな子供だったんです。

1974年、テレビドラマに子役としてデビューしました。『がんばれロボコン』という番組です。おそらくみなさんのお父さま、お母さまの世代は知っていらっしゃると思います。ロボコンという、根はいいけれどドジばかりしているロボットが主人公で、その憧れのマドンナであるロビンちゃんの役でした。この番組がすごくヒットし、それをきっかけに子役の仕事も順調に続いていきました。これが私にとって、この仕事との最初の出会いです。いい出会い、いいスタートをさせていただきました。

しばらく子役時代が続いた後の1981年、高校生になったときに、アイドル歌手をやってみないかと言われました。せっかくのチャンスと思い、私は「マンガチック・ロマンス」という曲でアイドルデビューをしました。女子がみんな松田聖子さんの髪型をまねていた時代です。2曲目は「今がチャン

ス！」という曲で、計4枚のシングルを出したのですが、これが全然売れなくて、どんどん仕事が減っていきました。17、18歳の頃には「やっぱりこの世界、向いてないのかしら」と、悶々とした日々が続きました。初めて挫折感を味わった時期でした。

## ミュージカルの舞台へ

悶々としていても仕方がないので、1982年、小さいころから憧れていたミュージカルのオーディションを受けてみようと思いつき、『シンデレラ』という舞台のオーディションを受けました。ミュージカルは歌と踊りと芝居、好きなことが一通りできるので、いつか挑戦したいと思っていました。主役のシンデレラには300人ほどの応募者がいましたが、なんといきなりシンデレラ役で合格することができました。初舞台で主演ということで嬉しく思う反面、私に務まるのだろうかという不安もありました。必死で稽古して、初日を迎えました。すると、メイクをして衣装をつけて観客の前に立ったときに、なにか自分が今までまったく気づけなかった、ずっと奥底に眠っていたエネルギーのようなものがふつふつと湧いてくる感じがしました。ミュージカルってなんて楽しいんだろう、もしかしたらここが一番自分が輝くことのできる場所かもしれない、よし、私はこの舞台女優への道を歩いていこう！って初日の舞台の上で思ったんです。固く決意することができたんですね。その時の光景は忘れられません。私がミュージカルと大きな出会いをした瞬間でした。

舞台女優への道を決意してからは、なんの未練もなくアイドル歌手をやめました。アルバイトをしながら、ダンスや歌のレッスンをして、オーディションを受ける日々が始まりました。いろいろなオーディションを受けました。受かったものもありましたが、落ちたものいっぱいありました。受かっても、急に良い役がもらえるわけではなく、アンサンブルとって、セリフも一言、二言で、舞台の隅のほうで歌ったり踊ったりするところからのスタートでし

た。なかなかスポットライトを浴びることもできません。主役の方が近づいてきた時に、そこに当たっているスポットライトの端に何としてでも入って、そのなかでいかに目立つか努力する(笑)、そんな日々でした。それでも一つ一つ作品をやらせていただくなかで、演出家や音楽家、スタッフの方々から「歌穂ちゃん、こんな作品のオーディションがあるんだけど、受けにおいでよ」とか、「歌穂ちゃん、こんな役あるけど、やってみる？」と声をかけていただけようになり、徐々に役にいただけるようになっていきました。

## 芝居との出会い

ミュージカルをやりながら、同時に芝居との出会いもありました。ご縁があり、井上ひさしさんのこまつ座の舞台に出させていただくようになりました。それまで西洋のミュージカルしか知らなかった私にとって、これは非常に大きな出会いでした。『日本人のへそ』、『イーハトーボの劇列車』、そして『花よりタンゴ』という井上さんの書き下ろしの作品にも出演させていただきました。井上さんの作品との出会いで、日本語の美しさ、深さ、難しさ、大切に…本当に多くのことを学ばせていただきました。非常に大きな女優修行の原点となった出会いでありました。

様々な舞台と出会う間には、アルバイトをしていた時期もありました。皆さんのなかにもアルバイトされている方がたくさんいらっしゃると思います。私は実家で暮らしてはいたんですけども、歌やダンスのレッスン代はやはりお金がかかりました。レッスン代だけは親に迷惑をかけてはいけないと思い、アルバイトを探し始めました。そのとき父が声をかけてくれたんです。当時父はある店でショーの構成、編曲、そしてピアニストとして仕事をしていました。そこで私もジャズを勉強するように勧めてくれました。父が働いていたお店で、2年半ほどアルバイトしながらジャズの基礎を学んで、お客様の前で歌わせてもらうことができました。これは本当に幸いなことでした。

思い返してみれば、19歳から21歳の、みなさんと同じ時期の私は、アイ

ドル歌手としては売れず、ミュージカル女優の道を歩み始めながらも、それが軌道に乗るまでの間は、アルバイトをしながらオーディションを受け、苦しくて悩んだ時期でもありました。でも、もしアイドル歌手として売れていたら、ミュージカルとの出会いはなかったかもしれないと思いますし、もし舞台を始めてすぐ仕事が軌道に乗っていたら、アルバイトをしてジャズの基礎を学ぶという出会いもなかっただろうと思います。本当にすべてに意味があり、何一つ無駄な経験はないということを感じています。

### 『レ・ミゼラブル』のオーディションに合格

その後、人生を変える大きな出会いがありました。1986年に、ミュージカル『レ・ミゼラブル』のオーディションを受けました。このミュージカルは、原作がフランスの大文豪、ヴィクトル・ユゴーの代表作とも言われている作品です。創立者池田先生もしばしば『レ・ミゼラブル』に言及されています。主人公ジャン・バルジャンを中心に、さまざまな人々の愛が描かれた作品ですが、これがイギリスでミュージカル化されたのが1985年、日本では1987年からロングランが始まることとなり、それに向けての大々的なオーディションが行われました。あるとき劇場に入ると「あなたに白羽の矢が立つ！」という大きな見出しのポスターがありました。なんだろうと思って見ると、『レ・ミゼラブル』のオーディションの応募要項が書いてありました。プロ、アマ問わず、老若男女問わず、全役のオーディションを行う、これはスターを作るミュージカルである！という広告です。私は、これは何かすごいことが起きそうだと思って応募しました。

しかしあまりに大きな作品ですので、主な役は有名な方がやるに違いないと思っていました。スタッフも海外から来るということでしたので、とにかくこれは力試しで、参加することに意義があると思って応募しました。全国から12,000人の応募者があり、私が受けたエポニーヌの役は一番高い競争率の3,000人以上の応募者が集まりました。これが一次審査、二次審査、三

次審査、そして最後に四次審査まであって、最終的に合格することができたんです。他に主な役で合格された方は、鹿賀丈史さん、滝田栄さん、岩崎宏美さん、斉藤由貴さん、鳳蘭さん、野口五郎さん、斉藤晴彦さん、という、大変に有名な方ばかりでした。そこに無名な私が一人ぼつんと入らせていただいた形で…こんな大きな舞台の、こんな大きな役が私に務まるのだろうか、稽古をすればするほど不安が募る一方でした。これはなにかの間違ひではないか、どっきりカメラかなにかではないか(笑)、と思いました。でもとにかく、今の自分に与えられた使命を果たせるように、できる限りの力を与えてください、勇気を与えてください、と祈る思いで毎日毎日必死にお稽古を重ねていきました。

## 人生の師匠との原点

そして初日まであと一ヶ月となった、忘れもしない1987年5月10日、ありがたいことに人生の師匠池田先生と初めてお会いする機会に恵まれました(第10回芸術部総会)。そこで先生は北原白秋の生き方を通して、芸術に対する大事なご指導をしてくださいました。そこで私が命に刻ませていただいたのは「本物になりなさい」というご指導でした。「大事なことは、本質が光っているかどうかである。本物はどこまでいっても本物であり、偽者はあくまで偽者である。芸術の道を探求されている皆さまは、世間の風評などに左右されず、自らの道を、日々、確かな足取りでたゆみなく進んでいただきたい」。

芸術家として技術を磨くことは当然だが、それとともに自分自身の命の鏡を磨いて、磨いて、何物にも揺るがない本物の芸術家になりなさい、と。この日が私にとって人生の師匠との原点を刻ませていただいた、生涯忘れえぬ、かけがえのない出会いの瞬間でありました。

こうして大きな勇気をいただいて、いよいよ『レ・ミゼラブル』の初日を迎えることができました。この作品が大評判となり、連日大入りの超満員でした。新聞や雑誌、各マスコミでもこの『レ・ミゼラブル』は大絶賛され、

なかでも無名で新人の島田歌穂という女優がとてがんばっているという風にも書いていただきました。そこで、私はこの作品をきっかけに芸術選奨文部大臣新人賞という大きな賞をいただき、NHKの音楽番組にレギュラーで出演、紅白歌合戦にも2年連続で出場させていただきました。初出場のときに私は『レ・ミゼラブル』のソロ曲を歌ったのですが、この時の白組では市村正親さんが「オペラ座の怪人」を歌われて、紅白でミュージカル対決をさせていただきました。思い出深い場面です。

またイギリス王室主催の「ザ・ロイヤル・バラエティー・パフォーマンス」という夢のようなステージにも出演させていただきました。これは、ずっと昔から毎年行われているチャリティー・コンサートで、毎年世界中からアーティストが集まって女王陛下の前でそれぞれのパフォーマンスをお見せするという舞台です。ちょうど『レ・ミゼラブル』が世界各地で公演され始めて間もない頃でしたので、世界のキャストを集めて女王陛下にお見せしようということで、ロンドンのカンパニーに加えて、ジャン・バルジャン役はイスラエルから、革命のリーダーのアンジョルラス役はニューヨークから、そしてエポニーヌの役は日本から私が出演させていただくことになりました。このようにインターナショナルなキャストで、女王陛下の前でレ・ミゼラブルのメドレーを披露させていただきました。それぞれの母国語で歌った後に、最後は全員英語で大合唱をしました。私も日本語で自分のソロを歌わせていただきました。終わったあと女王陛下が一人ひとりに声をかけてくださり、握手してくださいました。私はすごく緊張してしまい、ご挨拶の言葉を「I'm very honored to meet you」という丁寧な言葉で一生懸命練習していたんですけれども、いざ女王陛下にお会いした瞬間、「Thank you very very much」としか言えませんでした（笑）。これも忘れえぬ光栄な出会いの瞬間でありました。また、その後、『レ・ミゼラブル』の世界のキャストでレコーディングをしたベスト・キャスト・アルバムが作られ、私は日本人で一人だけ参加させていただきました。シドニーで、全部英語で録音したんですが、なんとこれがグラミー賞を取ることができました。

こうして私は、『レ・ミゼラブル』との出会いによって人生を大きく開いていただきました。それからずっとロングランが続き、私は1987年から2001年まで14年間参加させていただきました。出演回数も1000回を超え、自分自身もまさかこれほど長く続けることになるとは思っていませんでした。ロングランへの参加が終わったあとも特別公演があり、2011年のファイナル公演をもって私は『レ・ミゼラブル』を卒業しました。

作品との出会いとともに、演出家との出会いも本当に大きいものがありました。ジョン・ケアードというイギリスの演出家から学ばせていただいたことがたくさんありました。『レ・ミゼラブル』は、セリフはなく、すべて歌で運んでいく作品です。ですので、いかに歌をセリフとして伝えるか、いかに歌で会話していくかという、歌を芝居で伝えるということを徹底的に教わりました。また、ロングラン公演の一回一回をいかに新鮮にやっていくか、ということも教わりました。小さなことでもいい、毎回何か新しいことに挑戦し続けていきなさい、新しい挑戦をすることで必ず新しい発見があるはずだ、と。日々自分に挑戦し続けることの大切さ、それを大きく学ぶことができました。

## 両親との別れ

このロングランが続く間、女優としても歌手としてもさまざまな出会いがありました。まずは『アニーよ銃をとれ』というミュージカルで初めて主演を務めました。そして『スウィート・チャリティー』や『江利チエミ物語』。さらに、さまざまなお芝居にも挑戦しました。こまつ座の井上ひさしさんの『黙阿彌オペラ』という書き下ろしの作品です。そしてシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』ではジュリエットを演じました。ちなみにロミオ役は内野聖陽さんでした。内野さんが主役をされた『ベガーズ・オペラ』という作品にも出させていただきました。また、歌手としては、『HOTEL』というドラマで主題歌と挿入歌を歌わせていただき、これがヒットソングとなりま

した。アルバムを出し、コンサート・ツアーもやらせていただけるようになりました。こうして仕事の上で順風満帆にさまざまな出合いを重ねるなか、プライベートにおいては大きな別れもありました。

実は『レ・ミゼラブル』をやっている最中、1990年には母が肺がんで他界、1998年には父が心不全で他界しました。しかし父も母も本当に見事な最期を見せてくれました。

母は食道から肺にガンが転移しましたが、最期の最期まで苦しまず、穏やかに淡々とガンに向き合う、という闘病生活を送りました。私がコンサート・ツアーでしばらく東京を離れていたときに急に容態が悪化して、死に目に会うことはできなかったのですが、私はその訃報を聞きながらなんとか踏ん張って本番を終えて東京に戻りました。最初は母の顔を見るのが怖かったのですが、勇気を出して母の顔を見ると、本当にきれいな清々しい、良い顔をして眠っていてくれたんです。私はその顔を見たときに、悲しい気持ちがポーンと飛んでいってしまいました。思わず、「お母さん良かったね、大勝利だね、おめでとう」って声をかけていました。まさか自分の口から「おめでとう」という言葉が出てくるとは思ってもみませんでした。でも、母のすやすやと気持ちよさそうに眠っている顔を見たときに、死ぬというのは決して悲しいことではないんだ、母は母の人生を生き抜いて戦い抜いて何も悔いはないんだ、これは別れではなくて母の次の人生に向けての出発なんだと思いました。母の顔が、一瞬にして、生死というものを前向きに受け入れさせてくれました。これもまた忘れられない、母が最後に私に大切なことを教えてくれた瞬間でありました。

父の死も急でした。父はもともと高血圧で心臓が弱く、脳梗塞で二回ほど倒れて、社会復帰したのですが、最終的に心臓が持ちこたえられずに亡くなりました。父は北海道の生まれですが、あるとき父のふるさとに素晴らしい音楽ホールができることになり、その柿落として音楽祭をやることになりました。父がその構成と演出と音楽、作曲・編曲、演奏、指導など全部を任せていただき、その準備のために何度も何度も北海道に通っていました。そし

て私も父と一緒にそのコンサートに出る予定でした。準備を全部やり終えて、その本番の直前に父は倒れて、そのまま亡くなってしまったんです。あまりに急なことで、私は愕然としてしまいました。ところが、父のふるさとの皆さんが「お父様の意思ですから、予定通りやりましょう」と言ってくれました。父の追悼コンサートという形で、故郷の皆さんで父を送り出してください、本当に感動的な音楽祭にいただきました。後から考えれば考えるほど、父は最期までやるべきことをやりきって、何の悔いもなく、その時を選んだんだ、父も父の人生を戦いきったんだと感じます。人生を誇らしく生きぬくということを、私は父の姿から教わりました。

皆様のなかにも、お父さま、お母さまを亡くされた方がいらっしゃるかと思いますけれども、両親との別れというのは、もちろん悲しいことです。ですが父と母がその最後に人生の大勝利の姿を見せてくれた。このことによって私は悲しい思い出というよりも、感謝の思い出にさせてもらうことができました。なんて幸せな娘だろうと、両親に感謝でいっぱいあります。今日のテーマは「出会い」ですが、「別れ」というものもまた非常に大切なものを私のなかに残してくれましたので、プライベートな話になってしまいましたが、少し両親のことを紹介させていただきました。

## 人生の伴侶との出会い

両親との別れの間大きな人生の出会いもありました。1994年、私は人生の伴侶と出会いました。夫は島健という作曲家、編曲家、プロデューサー、ピアニストであります。そして島田歌穂はもともと私の本名でしたが、たまたま島さんという人と結婚したので、今の私の本名は島歌穂です。「たぬき」になってしまいました(笑)。主人は多くのアーティストの方々と一緒に仕事を一緒にさせていただいています。たとえば、サザンオールスターズさん。昔「TSUNAMI」や「白い恋人達」をはじめ、桑田佳祐さんのいろいろなプロジェクトに参加させていただき、最近出された「葡萄」というアルバムも何

曲かアレンジを担当しています。また、JUJUの新しいジャズアルバムのプロデュースや、中島美嘉さん、浜崎あゆみさん、平原綾香さん、ゴスペラーズ、GLAY、それから先輩では森山良子さん、加藤登紀子さんともお仕事を一緒にさせていただいています。

私自身も主人とのデュオ・コンサートや、アルバムなどいろいろな活動をしています。『ウエストサイド・ストーリー』や『蝶々さん』、『The Light in the Piazza』等のミュージカルも、主人の音楽監督と一緒に作ってきました。私の両親は音楽家と女優・歌手という組み合わせだったのですが、気づけば私自身も音楽家と結婚していて、縁、出会いというのは本当に不思議なものだと思います。あっという間に、今年で結婚して22周年になりましたが、この出会いに感謝して、これからも夫と共に、いい作品を沢山作ってきたいと思っています。

## 教育の道へ

ここまで多くの出会いが、仕事上でもプライベート上でもありましたが、実は教育の分野でも出会いがありました。2003年、大阪芸術大学から「歌の授業をやってみませんか」というお話をいただきました。まさか私が教育の場に携わることになるとは思ってもみませんでしたので、びっくりしてしまっ、お引き受けするかどうか悩みました。その中で、ふとあることに思い至りました。私の父は晩年、ミュージカル俳優を目指す若い人たちに歌を教えていました。たくさんの教え子たちに囲まれている父の姿は本当に嬉しそうで、きっと父にとって教え子の一人一人が宝物なんだろうなあ、と感じていた、その光景を思い出したんです。私がお話をいただいたのも、もしかすると決して偶然ではないのかもしれない、父の思いを少しでも受け継ぐことができる機会かもしれないと思いました。そして、2003年4月から大阪芸術大学舞台芸術学科ミュージカルコースで授業をさせていただくことになりました。教えるというよりも、今まで経験してきたことを最大限に伝えら

れることを伝えさせていただこうという思いで取り組んできました。気づけばもう13年になりますが、毎回毎回、授業に行くたびに私のほうが学生からいっぱい学ばせてもらって、たくさん元気をもらっています。元気をもらっているというより、若さを吸い取らせてもらっているっていうんでしょうか(笑)。

今日も、もしかしたら皆さんからすごく若さを吸い取らせてもらっているかもしれませんが、創価大学ともありがたい出会いをさせていただきました。ちょうど大阪芸術大学からお話をいただいた頃に、大親友で女優の田中美奈子さんから「一緒に創価大学の通教やってみない?」と誘われたんです。私は子役から仕事を始めて、なんとかギリギリで高校を卒業できたような状況だったので、教える立場になると同時に、もう一度学び始めようと、2003年に創価大学に通教生として入学しました。入学式には創立者の池田先生もご出席され、温かな眼差しで学生たちを包み込むようにスピーチをくださる師匠のお姿に、ただただ大感動でした。また、夏季スクーリングでの出会いがまた素晴らしく、日本全国だけでなく海外からも、年齢も関係なくすべての壁を乗り越え、同じ学生として学ぶ、この出会いにも毎回たくさんの感動があります。通教で出会った方々とは今でも交流が続いています。

大阪芸術大学で教えた卒業生たちは、今では実際に社会の舞台でどんどん活躍してくれています。劇団四季、東宝のミュージカル、ディズニールンドやディズニージーでショーに出ている卒業生もいます。そして私自身も卒業生と同じ舞台で共演できるようにもなりました。これほど幸せなことはないと思っています。一人でも多くの教え子と共演できるように!と、私の大きな励みの一つにさせてもらっています。これからも文化とともに教育の場でも、使命のある限り精一杯頑張っていきたいと思っています。

## 更なる挑戦

こうして教育との出会いがあった後にも、女優として大きな挑戦をさせていただきました。2006年、『飢餓海峡』というお芝居への挑戦でした。この

ときの演技に対して、大変嬉しいことに、紀伊国屋演劇賞個人賞、読売演劇大賞優秀女優賞という栄えある賞をダブルで受賞することができました。これも女優として、さらに扉を開いていただいた大きな出会いでありました。

執筆にも挑戦して本も出ささせていただきました。「私の祖母は101歳のお嬢様」というタイトルで、祖母の生涯を孫がつづるという形での出版です。祖母は、私の両親の亡き後、両親の分も生きて、生きて、生き抜いて101歳で天寿を全うしました。95歳のときには一緒にニューヨークに行きました。自由の女神を背景にとった写真は「二人の女神」と呼んでいます(笑)。祖母は亡くなる数日前まで私のステージを見に来てくれていました。そして最後まで一人暮らしを貫きました。そんな祖母の人生について書くという挑戦でした。

思い返すと、私は母が亡くなったときもコンサート・ツアーのステージで歌っていて、父が亡くなったときもその追悼コンサートのステージで歌っていた、そして祖母が亡くなったときも私はコンサートで歌っていました。これは何があってもお前はステージで歌いなさい、という私が歩むべき使命の道を教えてくれているように思えて仕方がないんです。もちろん今でも、自分の歩んでいる道は本当にこれで正しいのだろうか、ときどき壁にぶち当たって分からなくなるようなことがあります。でもそんな時には、家族が私の中に残っていてくれたものが大きな力を与えてくれていることを感じます。しっかりとずっと見守ってくれていることを信じて頑張って歩き続けていかなければと思います。

こうしてさまざまな出会いを重ねて、気づけば生まれてもう半世紀を過ぎました。振り返れば振り返るほど、私は生まれ育った環境のなかで、なんの抵抗もなく両親と同じ芸術の道を自分自身の使命の道だと信じて、たくさんのお会いと機会に恵まれながら、その一つ一つを宝物、大きな勇気として、まっすぐにここまで歩いてくることができました。これからもひとつでも多く宝の出会いを重ねていけるように、そしてそうした宝物を届けられる人になれるように、生涯、日々自分自身を磨き続けていきたいと思っております。

## むすびに

最後に、未来への希望あふれる使命深き皆さんに、池田先生の『青春対話』から一節を読ませていただきたいと思います。

「ある意味で、どんな時代にも、深刻な苦しみはある。どんな時代にも、青春は悩みとの葛藤です。また、勉強のことだけではない、家族のこと、健康や容姿のこと、異性のこと友人のこと、いろいろな悩みがある。苦しみもある。不安もある、悔しさもある、悲しみもある。あらゆる悩みとの戦いが青春時代です。そのなかでもがきながら、暗雲を書き分け、太陽に向かっていこう。希望に向かっていこう。この力が青春です。悩みや失敗や、後悔があるのは当たり前です。大事なのはそれらに負けないことだ。悩みながら、苦しみながら、前へ前へ進むことです。大事なのは、じっとこらえて今に見ろ！の精神です。青春はあせってはならない。君たちの人間としての真価が問われるのは10年後、20年後、30年後です。そのときにどうかです。そのときに使命を果たしたかどうかです。すべての人に自分でなければできない、自分の使命がある。使命がなければ生まれてきません」。

また、「使命をわかるにはどうしたらいいんでしょうか」という質問に、池田先生はこう語っておられます。「じっとしていたのではわからない。なんでもいい、何かに挑戦することです。その努力の積み重ねのなかから自然に方向性が決まってくるものです。だから、いま、自分がやるべきことは何なのか、それを避けてはいけません。目の前の山を登れ。ということです。山に登ればともかく足は鍛えられる。鍛えられた分、次のもっと大きい山に挑戦できる。この繰り返しです。使命があるんだ、ということを忘れない人は強い。どんな悩みがあっても負けない。悩みを全部、希望のエネルギーに変えていけるのです」。

学生の皆さんの年代では、大学生活のなかで何か結果を出さなければいけないと焦るときもあるでしょう。でも私がいつも学生の皆さんにお伝えしていることは、焦るな、ということです。社会に出てからが本当のスタートだ

から、20代は全部やり直しがきくから、いくらでも失敗していいということ、自分自身が感じてきた実感として伝えていきます。本当に使命深きお一人お一人です。どうか皆さん、自分を信じて、そして一つ一つの出会いを宝物にして、自分にしか果たせない使命の道を堂々と歩んでいってください。ご清聴ありがとうございました。